

IX 日本の都市社会の未来像

第二 都市論形成の軌跡

一 印象に残る都市の生態

私が未来の都市像などといった、大それた課題にあえて取り組もうとするのには、八十年の生涯を、“東京”を一応の故里—それは生涯を送ったという意味で一としながら、“都市社会への挑戦”は、理念的にも現実的にも、地球上のあらゆる面に関係をもつからである。

理論的には、自分の学位論文が「日本都市社会構造の分析」であり、日本都市学会の最初からのメンバーであったことからである。現実的にはその生涯の半分を、「東京の行政」に直接たずさわったこと、そして数十回にわたる海外旅行の大部分は、都市問題の研究か視察のためである。

一九六三年（昭和三八年）、私が六〇歳という“還暦”のときに、友人達の奨めで「都市問題事典」（鹿島出版会）を編集主宰して、都市研究への一つの拠点を印している。その後一〇年たって訂正新版を求められたとき、自分の生涯で見て廻った海外の都市のなかから五〇を選んでコメントしている。それは私が見て廻った都市のうち、これまで多くの解説書・案内等に記述されているものとは異なった、“視点”をおいていることとして、今日でも自負している。そのなかで、世界の大都市といわれるニューヨーク、パリ、東京の三つをとりあげてみると、次のような理論的な話ができそうである。

第一に、ニューヨークは、世界各国の変動を常にまともうけている都市である。その実際は、一九七〇年代にアメリカが直面したベトナムをはじめ、中南米そして中東などの戦乱の影響が随所に見られる。ときにはここは“ディストピア”（衰える都市）ではないかという印象さえうける。しかし、少し科学的に考えると、ここは、常に世界で最も高い建物のあるところとしての誇りを持ちつづけている。それは今日でも変わらない。新しい超高層ビルの建設は今も進んでいる。しかしその足もとには、瓦礫や紙屑にまみれた“ホボ”（浮浪者）が眠っている。戦場での死傷兵の姿といった感じさえする。

すなわち、この都市の繁栄の基礎には、建物という物理的に高いものと、生活という現実的に低いものが“共存”していることである。

このうち“低いもの、貧しいもの”は、遠くアジア（ベトナム等）や中南米（ブラジル等）からやってくる。なぜアジアからは近い日本の東京に集まってこないかという疑問がわく。しかしよく考えてみると、東京には、遙か南米やアジア大陸から、海をこえてもやってくるといった“アメニティ”（消極的な意味での）がないからではないかと思う。

そして、ニューヨークには“古さ”がある。よくいえば“歴史”があり、別の表現をすれば“文化”があり、職業能力に欠ける外国人も何とか住める機会がある。また一面では“古さ”と“新しさ”が混在する。

ニューヨークの五番街、ロックフェラー・プラザという中心に近いところに、古い教会がある。超高層ビルの谷間によくも存在すると思うが、一たび扉を開くと、真暗い講壇の前には、何百というロウソクが光を投げている。よく見ると、その前に跪いて祈りを捧げている多数の“市民”を見出す。それは戸外の超モダンな建物の構造とは、全く異なった風景である。

「高いものと、低いもの」、それは建物だけではない。収入・身分・職業等あらゆるものを通じての“格差の存在”が、この都市の魅力をつくっているのである。

第二に、文化という面も含めて、やはり世界の大都市といわれるパリを思い出してみる。少なくとも私

にとってパリとは何であるかと問われれば、シャンゼリゼ通りの“喫茶店（カフェと呼ぶ）と答える。

何度かのパリ訪れのたびに、私はこの“露店式喫茶店“にひかれる。それは比較的道幅の広い路上に、特定の店だけが店を広げている。そこに坐って一杯のコーヒーを注文しながら、通りを歩く人や車などを見る。背景には、皇帝ナポレオンの記念ともいべきエトワールの凱旋門が見える。

ナポレオンはある意味では、第二次世界大戦の原動力となったヒトラーに相当する独裁者だった。それが、自由と平等を誇るフランスでは、あらゆる魅力の対象となっている。

実は、この私の好きな喫茶店は、ナポレオン時代に、道路の占用を許可されたという。たしかに、その許可証が店に飾ってあったことを見ている。

この都市でも、古いものと新しいもの、そして皇帝としての権威と、平和としての平等が共存している。それでは建物はとなると、パリは、その”古さ“を守るために、すべての新しいものは、デファンスと呼ばれる副都心に集中している。

それは“遷都”かということと必ずしもそうではない。ただ高いものが、“古い価値”を減らさないために、別に位置しているのである。

第三に、それでは東京は、となる。たしかに東京は日本はいや世界のメトロポリスである。しかし最近では、その発展を象徴するかのように東京シティホールは、新しい副都心新宿に移ることが決まった。まさに、“世紀の決断”といってよい。

しかし、東京をニューヨーク、パリと比較してみると、建物の高さは、ニューヨークとは比較にならないほど低い。しかし建築中の高層ビルの下で、野宿をするような貧しさは見られない。

一九八五年の「国民生活白書」で、政府は、日本人の八〇%以上が“中流階層”としての意識をもつと述べている。ある新聞社の世論調査では、それは九〇%に近いとまで報じている。

このような状況からすると、東京はニューヨークやパリとは異なる条件をもつ都市といえる。しかしそれは、生活条件の平均化だけからの問題ではない。東京は一九四五年以前の不幸な戦争で、都市の必要とする“古さ”の大部分を失っている。いわんやそれから二〇年ほど前の一九二三年には、大震災につづく火災で古さのすべてが消えている。これは東京が都市としての条件を“見失う”おそれのある課題として見逃すことはできない。

東京に次いで日本のユニークな都市といえば京都。しかし、この京都は、以上のような基礎的な印象からしての欠点をもっている。それは不幸にも、京都駅近くに建てられた“京都タワー”の存在である。なぜあのような“新しい構造”が、“古い環境”のなかに建てられたのか。「新旧共存の論理」からすれば、その構築は当然のように見える。しかし京都は古さを誇りとする。しかも”古きもの“の構築には、歴史と時間が必要である。

外国からの訪客は、あの京都の塔を見て博覧会が開かれているのかと尋ねる。同じ塔でも、京都の場合は、何百年の歴史が背景にあってこそはじめて都市のシンボルとなる。

二 都市理論構築の生態基盤

このような課題で述べるのは、私の都市論の形成に、どのような人物の影響があったかという点に限られる。考えてみると、そこに日本の友人が見当たらないのが残念である。

一九四五年に終わりを告げた太平洋戦争で、日本の都市と呼ばれる地域の大半は、空襲によって破壊された。その不幸な代表となったのは広島・長崎である。

一九六三年、第一回デロス会議と呼ばれる世界都市問題会議が、ギリシャの建築学者コンスタンチノス・ドクシアデスの主宰で、ギリシャの首都アテネで開かれる。その実際は、エーゲ海を船遊しながら、最後はデロス島で閉会式をやる。そこで通称デロス会議と呼ばれ、一九七三年まで毎年開催された。どういう因縁か、二年毎に交替する会議の第三回の議長を私が務めることになる。

あえて私が“理論的な軌跡”などというのは、私の都市論に影響を与えた学者のほとんどは、この会議のメンバーだったからである。

(一) コンスタンチノス・ドクシアデス

すでに故人となった教授は、自ら“エキスティックス”（私はこれを人間居住学と訳した）の理論を提唱し、人間の居住形態の過程のなかで“都市”を位置づけし、それを主として人口の数量に比例して、メトロポリス（大都市）、メガロポリス（超大都市）、エキュメノポリス（世界大都市）等、十四から十六の段階に類別する。

彼の理論は、コミュニティと呼ぶ“自然集落”の段階と、それ以上に人口が多くなる“都市集落”とを区別する。その発展段階の過程に、メガロポリス、エキュメノポリス等を位置づけしていることは、私の関心の的となっている。論集第 III 巻の一部は、彼の理論を記述した本をとり入れている。

ただ彼の理論は、せっかく都市の形成に“人間”という要素を取り入れながら、その人間がつくる“集団”、それが拡大していろいろな“組織”をつくり、都市もそのような系列の発展にあることについて、必ずしも十分な関心をもたなかった。コミュニティという言葉に、社会学でのとらえ方に近いセンスを持ちながら、それ以上の発展をさせなかったことには不満を覚える。

(二) マーガレット・ミード

有名な文化人類学者であり、ニューヨークの大都市博物館の館長をもつとめるかたわら、コミュニティ理論についての独自の見解を公にした。デロス会議での理論的指導者でもあった。

彼女の理論は、人類学者という立場もあって、“女性”の地域形成への役割を主張したことは注目される。私の理論指導に若干の影響を与えたとするならば、この点に集約されるといってよい。

(三) アーノルド・トインビー

同名の経済学者があったが、親戚の関係にあるが、別の人物である。歴史を専門とするロンドン大学の教授である。彼の理論が私にとり入れられたとするならば、都市とは人間がつくる社会であるといった視点である。その論議の延長上に、都市を人間の文化の創造とみようとする。この点では私と同意見である。

ドクシアデスの地域構成の終点はエキュメノポリスとなっているが、トインビーはそれを文化の役割と見ようとした。それは過去に人間が、いくつかの都市づくりをしながら、たえず新しいものに挑ん

でいることを跡付けしていたと思われる。

(四) ルイス・マンフォード

社会学者であるがむしろ文明論者として知られ「都市の文化」という有名な著書がある。彼はトインビー教授以上に、都市のあらゆる構造を、人類の文化の所産とみる。この点は間違いないのであるが、都市は人間の集団である限り、その結晶を、社会の進歩のうえでどのように見るかという点の指摘が欲しかったと思う。もし彼がトインビーと直接話し合うような機会があったら、あるいは同じ結論に到達したのではないかと思う。

必ずしも同じ社会学者だからというのではない。また私は彼にたった一度であるが会って話したことがある。トインビーとは若干異なって、自分の学説に予想以上の自負を持っていたようである。大部な著書を残しているわりに、深みのある印象は少ない。

(五) ジャン・ゴットマン

ドクシアデスの都市体系のなかにあるメガロポリス論を拡大解釈して、二一世紀の都市は、この言葉で表現されるとまで主張するのがゴットマンである。

フランスの地理学者であるが、母国よりもアメリカ（プリンストン）や英国（オックスフォード）の大学での研究が多く、よく知られている。「メガロポリス」という本も、プリンストン大学時代の研究業績である。私の著書に「日本のメガロポリス」というのがあるが、その構成・調査等は、ゴットマンの示唆に負うところがある。

以上のように、いずれの学者も、日本に国籍をもたない。この点では、私の外国の都市への訪問、その学者との接触等、国内の研究所よりも、その面での接触・影響のあったこと、それが以下の都市理論の展開につながるので予め明らかにしておくのである。

三 経験としての都市状況の把握

都市を見る科学者の目は、背景となる学問によって同じではない。都市工学というが、土木や建築の専門家達は、当然都市を構造の集積とみる。「神は農村を、人は都市をつくる」などという言葉が西欧にあるのは、その適例である。

しかし、建物の連続と見られる都市も、よく見ると、そこに人間が住んで生活している。ただし、人間の居住生活は必ずしも都市だけではない。農村だって、人間の住まいがあり、生活がある。したがって、私の専門とする社会学の立場からすると、都市は単に人間が居住し、仕事をするとところだけではないという経験である。私の都市の未来像を描く背景として、その経験の二、三をあげてみる。

第一は、一九七〇年代の都市の姿である。アメリカの経済の低調も原因したが、その国土に定着している“黒人”達の生活はいっそうきびしいものがあった。彼等はその救済を求めて都市に集まる。その都市とはシティ・ホールと呼ばれる市役所であり、市役所前の広場などである。

このような低所得の黒人達は、ついにその要求の貫徹のために、首都ワシントンを目指して行進する。そして国会前のワシントンの記念塔のある広場に自然に集まる。自ら称して“プーア・マーチ”（貧しい者達の行進）として後世に伝えられる。私はその光景を現地で見た。そしてそれこそが都市の象徴だという

ことである。国会前の美しい建物、リンカーンやジェファソン大統領の記念館は宿泊の中心となり、庭前のプールは占拠者の飲料水となる。警察がもっとも困ったのは、“汚物”の処理だったと伝えられる。

都市は、このように、人間がその住むところを離れても集合する。その場所は“広場”である。集まったものは、“大衆”と呼ばれる。大衆は、常に都市のもつ“権力”に対して、“是非の判断”をする。大衆のない、それを抑える空間としての広場のないのは、都市とはいえない。

そういえば、世界の大都市と呼ばれるところには広場がある。中国の首都北京の天安門の広場、パリの凱旋門と対応するコンコルドの広場、それらの名前を聞くだけでも、そこで繰り返された“大衆による出来事”は、その都市に、歴史と未来とを与えているのである。

この意味からすると、日本の都市、とくに首都東京には、いわゆる“広場”といわれるものは少ない。明治から昭和のはじめの時代には、“日比谷公園の広場”は随一のものであった。それが何時の間にか広場としての役割をやめた。太平洋戦争への突入の過程で、東京市民が“大衆”としての行動をすることを政府が抑止するための措置といわれる。

しかし、このように述べると、神宮や皇居前の広場があるというかも知れない。しかし、それは東京の市民が自主的に、“大衆”として利用できるような場所ではない。この点からすると東京は“欠陥都市”といわざるをえない。

第二は、しかもその東京でも“大衆”は自由の空間を求めている。一つの例は、一九七〇年代、日本の都市は“大学紛争”の渦中にあった。それは前述の“プーア・マーチ”の“学生版”ともいえる。私はその当時東洋大学の学長として、“学生大衆の攻撃の標的”だった。

彼等は、運動の目的を大学の改革などに止めていない。大学の立地している“区の解放”まで叫んだ。東洋大学（白山）の近くに東京大学（本郷）がある。二つの大学生達は連合して、文京区を“解放区”と称しその実現を図った。しかしこの地区には、学生大衆が集合する“広場”がない。その結果彼等は広場の代わりに“塔”を利用したのである。

“安田講堂”の名で知られている東京大学の講堂は、単にその大学のために機能するものではなかったのである。隣接の大学の学生と協同して、“権力の象徴”ともいべき講堂の占拠を図ったことになる。結果は一時的な占拠にとどまったが、もし東京に“大衆の広場”があったなら、そのような姿にはならなかったと思う。

そういえば、“革命の本場”ともいべきソ連の首都モスクワにも通称“赤の広場”といわれるクレムリン広場がある。そこは毎年革命記念日に軍隊の行進があるだけではない。中央には“革命の父レーニン”の墓地があり、外国からの観光客で賑わう場所となっている。それでも社会は“クレムリン”という言葉を使いつづける。都市は大衆によって、シンボルが期待されていることを示すといえる。